

## 松音知岳に現れる雪形「キツネ」の記録

佐藤雅彦

〒 097-0401 北海道利尻郡利尻町杵形字栄浜 142 国際雪形研究会利尻支部

### A Record of Yukigata "Kitsune" Appeared on Mt. Matsuneshiri, Nakaton-betsu, Northern Hokkaido

MASAHIKO SATO

Rishiri branch of the International YUKIGATA Society,  
142, Sakaehama, Kutsugata, Rishiri Is., Hokkaido, 097-0401 Japan

**Abstract.** A Yukigata recorded from Mt. Matsuneshiri, Nakaton-betsu, has been called "Kitsune" (Satō et al., 2004). It looks like a fox with a thick tail. When "Kitsune" was appeared on the slope of the mountain in spring, people said that it was time to sow seeds. Unfortunately, there are far too few people who know the folklore of "Kitsune" now. This report gives a detailed description about the Yukigata "Kitsune" which is the first Yukigata related to agriculture in northern Hokkaido.

#### はじめに

道北地方に分布する雪形はこれまで利尻島の「粹舟」と「猫の顔」の2つが知られているのみであった(田淵, 1981; 秋田谷, 1996; 山田ほか, 2001)。このことは、『残雪模様を遠くから眺めることができるような標高が高い山が道北地域に少ないことや、漁業や酪農などが盛んであり、農事暦として発達した雪形の伝承が伝わりにくかった』ことなどがこれらの地域の雪形文化の発達を抑えてきたのではないかと考えられてきた(佐藤ほか, 2004)。ところが、2004年8月に「道北地域の翼手目調査」で中頓別町を訪れた筆者は、中頓別鍾乳洞の管理人から同町に雪形が存在していることを聞かされた。聞き取り調査によってその雪形は「キツネ」と言われるものであり、道北地域では数少ない古くからの伝承をもった雪形であることが判明した。しかし、この時は夏であったため、雪形の実際の姿やその位置を詳しく確かめることができなかった(佐藤ほか, 2004)。そこで、2005年の春の観

察に基づいた雪形の記載と、これまでの聞き取り調査の結果を本報告で記す。

#### 調査方法

雪形の撮影に関しては、地元在住の高橋清氏(中頓別町・藤井)、後藤ミエ氏(中頓別町・宮下)との連絡により2005年5月21日、5月28日、6月4日に中頓別町を訪れ写真撮影を行った。伝承などについては両氏からの聞き取りのほか、2004年8月8日および2005年8月1日に中頓別市街を中心に10名による聞き取り調査を実施し、その結果をまとめた。

#### 結果と考察

##### 名称

「キツネ」。この雪形を知る3名のうち、2名がこの名称を使い、他の1名からは「キツネのしっぽ」という名称も聞いたことがあると聞かされた。どちらが一般的な呼称であったのかは伝え聞く人の数が

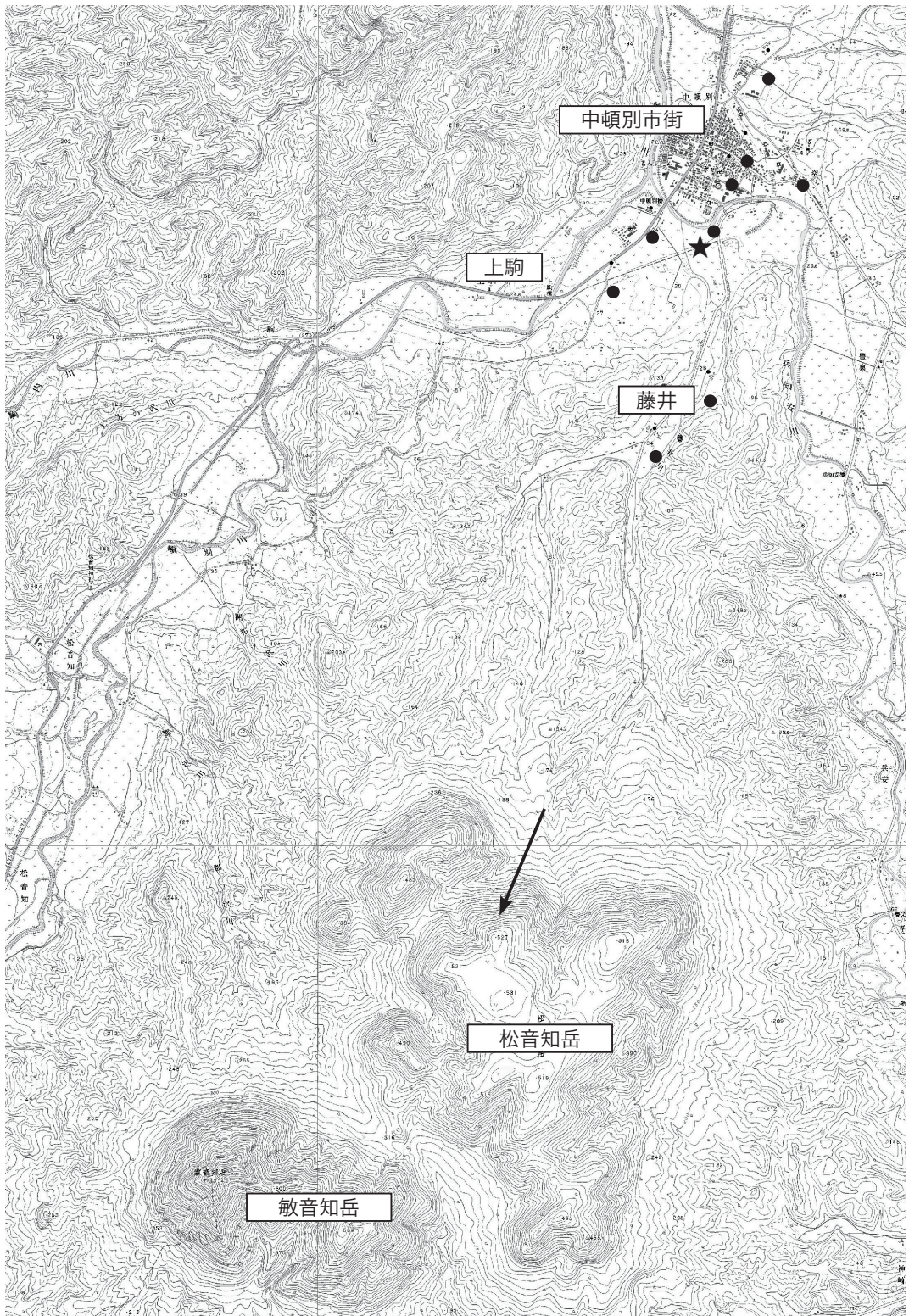


図1. 雪形の出現場所(矢印),聞き取り場所(●)および写真撮影場所(★). <国土地理院の数値地図25000(地図画像)『松音知』『敏音知』『中頓別』『上頓別』より掲載>

少なかつたため判断しかねるが、本雪形はキツネの全体像を示すものであるため、「キツネ」の名称を以下使用することとした。

### 出現時期

例年では5月初旬頃に姿を現すということであったが(高橋清氏談)、雪解けの進行状況や雪の多さによって大きく年変動することが予想された。2005年はキツネの姿が想像されうる残雪模様は5月28日には現れ始めていたものの、例年になく雪解けの遅さのため、雪形「キツネ」の姿がはっきりとしたのは6月に入ってからであった。

### 出現場所

松音知岳(標高531m)は、いくつかの小さな山や尾根が台地状に広がる山体を持つ。雪形「キツネ」が出現するのは、その北西に位置する527mのピーク

クを伴った尾根の北側斜面の上部と考えられ(図1の矢印, 図2a), 中頓別町の上駒地区から中頓別町市街までの、雪形が出現する斜面の北～北北東にあたる場所で観察することができる。しかし、市街地では建造物や河畔林などの障害物により、また藤井地区の中央部から南部にかけては松音知岳の別の尾根などによって視野が遮られ、必ずしもその範囲内にあっても観察ができるとは限らなかった。

### 形態

雪形「キツネ」は黒地に白のいわゆる「ポジ型」の雪形であり、その姿は頭を斜面の左側に向け、キツネを側面から見た形を呈している(図2b, 図2c)。頭部の他、前肢、後肢が識別可能で、最大の特徴は斜面右側に大きく延びる「尾部」と言える。2005年5月28日には既に大きな尾部がはっきりしているが、頭部や胴部の識別は不明瞭であっ

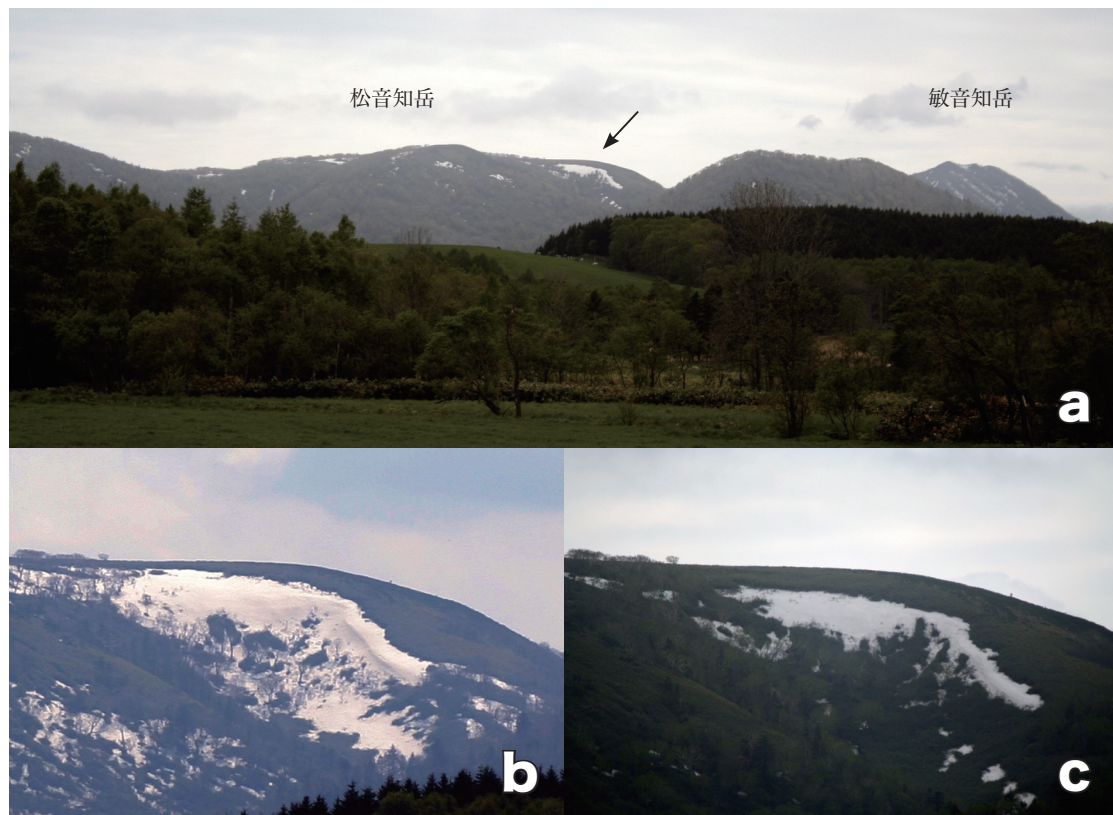


図2. 雪形「キツネ」。撮影場所はすべて藤井地区から南南西を向き松音知岳を望む場所(図1の★印)。a, 遠景(矢印が雪形)。2005年6月4日撮影。b, 2005年5月28日撮影。c, 2005年6月4日撮影。

た。この時、よく見るとキツネの顔に見える部分も識別されたが、これは本来の頭部にはあたらない。2005年6月4日には頭部、胴部が明瞭になり、その姿が明らかになった。ただし、前述のとおり2005年の出現状態は雪解けが例年通りに進まなかったこともあり、特に尾部は正常な形ではなかったと言われている（高橋、後藤両氏談）。

## 形成

雪形の形成には、植生や地形、風雪の状況など様々な要因が影響を及ぼしていることが予想される。しかし雪形は比較的遠い距離からその形が認識されることが多いことや、人々の目に付く高い山の上部に存在することなどから、現地調査に基づいたその要因について語られた雪形は国内でも非常に少ない。

この「キツネ」についても現地調査は困難なことが予想され、その形成に関わる明確な要因をあげることは現時点ではできない。しかし、夏季の写真により、頭部および胴部の全て、尾部の基部についてはササ群落により構成されており、周囲の低木や灌木との植生の差が、残雪模様の形成と密接に関係していると考えられた。尾部に関しては植生の差が写真でははっきりしないが、残雪期の様子を見ると、尾部中央には雪によって形成された隆起した形態がみてとれる。これは雪底に近い構造物のようにも見える。高橋氏がこの雪形について「雪が山の斜面にふきだまるためにそのような形がでるのではないかと想像されていたことと同じく、実際、この尾部を残雪期の時期の異なる写真（図2b、図2c）において比較すると、既に融解した場所における植生の変化はほとんど見られず、尾部の形成は崖などの急斜面に吹き溜まった雪の融解が遅くなり形成される地形的な要因が強いものではないかと想像された。

## 伝承

この雪形にまつわる伝承については聞き取り調査を行った12名のうち3名の方から聞くことができた。

高橋清さん（昭和14年生まれ）によると、5月初旬頃、松音知岳に「キツネ」と呼ばれる雪形が現

れ、これが現れている時ならば畑のものを蒔いてもよいと言われていたという。また、同氏が在住している藤井地区からは「キツネ」に見えるが、近くに行くとクマが寝ているようにも見えるという話も聞いた事があるということだった。

中頓別町生まれである後藤ミエさん（大正11年生まれ）からは、『「キツネ」のすべての雪がなくなるまでに種、ジャガイモをまきなさい』と言われていたという話を伺った。また、『「キツネ」のしっぽがなくなると「ウシ」が座っているように見える』という話も聞いた事があるという。

以上のことから、この雪形は農事暦と深い関連があることがわかった。中頓別町は昭和31年頃から現在に至るまで酪農の町として知られているが、その産業の歴史的な変遷は激しく、明治30年頃に見つかった砂金、豊富な山岳地帯を利用した林業、そしてジャガイモなどの農業などが次々と発展した時代があった。雪形「キツネ」が生まれた時代はジャガイモ産業が発展した時代の可能性もあるが、後述のとおり、様々な産業の発展と並行して常に行われてきた開拓移住以降の古い時代からの伝承の可能性が強く、言い伝えも「ジャガイモ」に限定されていない。

その一方、中頓別町に昭和13年に生まれたという男性（以後、Aさんとする）の話も大変興味深かった。Aさんは農業を生業としていたが、昭和40～42年頃に酪農に転業した方で、この雪形の伝承については昔から全く知らなかったといい、次のように話された。

『当時は様々な作物を常に育てていった。イモは5月10日以降で、農作業の一番最後に蒔くのが順番だった。イモの前は様々な麦（えん麦、小麦、裸麦など）を植え、その最後にイモとビートを植える。このように春は忙しい時期でもあり、「雪形」を気にして時期を決めるような余裕はなく、若い時にそのような話を聞く機会もなかった。』

また同じく中頓別町生まれで酪農とイモをやっていたという男性（大正13年生まれ；以後、Bさんとする）もこの雪形を知ることはなく、そのかわりに「カッコウが鳴けば、なにをまいてもいい」とい

う話を語ってくれた。「カッコウが鳴く頃には遅霜がもう来ない」という理由だからだそうである。このカッコウの初鳴きを農事暦に結びつけた話は豊富町生まれで中頓別町に約30年在住という女性（昭和25年生まれ）からも聞くことができた。この方は雪形「キツネ」も知っていた。

AさんもBさんもご自宅の場所からは雪形がはっきりと見える場所であり、なおかつ農業をされていた方であるにも関わらず、雪形「キツネ」のことを知らなかった。このことは、どういうことを物語っているのだろうか。雪形を知る3名の方は口を揃えて、この雪形のことは誰もがよく知っているはずと語ってくれたが、聞き取り調査をした合計12名中、9名の方は聞いた事がないということであった。

雪形が伝承されるためには、農事暦としての機能が有効であること、伝承を受け継ぐ人が代々その土地にいることなどが必要と思われる。近代農業が導入されはじめた頃の雪形は、農家にとっては単なる風物詩でしかなく、本来の意味での農事暦としての役割は既に現代の雪形の語り部が生まれ育った時代には終わってしまっていたのかもしれない。そのような場所ではごく一部の古老が雪形を記憶しているか、雪形と民話が融合して「物語り」として語り継がれているなどの例外を除いて、雪形の伝承は急速にその土地から失われていったことであろう。しかし、農業に携わる人々の形態も多様化し、精度の高い種まきの時期を必要としない個人や小規模な農家が残る土地では、単純でわかりやすい農事暦としての雪形の役割が脈々と継承されていったことも想像できる。

以上の点を考えると中頓別町では産業が時代によって大きく転向しつつも、専業農家と共に、北海道内のどの地方でも同じように行われているような小規模な農業が継続されてきた場所でもあり、一旦生まれた雪形文化はたとえ農業を生業とする人々の間からは失われようとも、松音知岳を眺め、作物の豊作を願い春を待つ人々がいる限り、その心の中には伝え続けられたのではあるまいかと筆者は考える。

そのため、雪形「キツネ」の伝承が定着した時期は少なくとも、現在の語り部の親世代である明治後

半以前であったのではないかと想像される。

## 継承

筆者が行ったわずかな聞き取り調査からは、雪形「キツネ」の将来を予想することは難しい。

古くからの伝承をもつこの雪形は、観光資源として十分活用できる可能性を持つものだが、積雪状態などによってその出現時期が年ごとに変動すること、出現期間が春先の雪解けの比較的短期間に限られること、観察可能な場所が狭い範囲に限定されること、など既存の観光ツアーなどでは扱いにくい面を持つ。中頓別町内や近隣地域の他の観光資源などと共にこの雪形がうまく活用されることによって、地元でも再びその伝承を見直す機会が増えることを今後は期待したい。

過疎化とともに伝承を知る古老が少なくなり、農業や地方から離れていく若い世代も多く、このような雪形の伝承が次の世代に確実に伝えられていく機会は減るばかりである。地方の記録として刊行されている町史や村史ですら雪形を記録するものは筆者の知る限りこの道北地域では皆無であり、山田(2000)が述べるように道内に人知れず眠る雪形伝承を早急に記録していくことが北海道の雪形研究の急務と思われる。今後は道北地方での雪形の再発掘を地道に実施していくとともに、記載方法の統一された雪形データベースの構築を目指していきたい。

## 謝辞

最初にこの雪形の存在をご教示いただいた高橋清氏（中頓別町・藤井）、そして雪形の話は何度もお聞かせていただいた後藤ミエ氏（中頓別町・宮下）のお二人に心から感謝したい。お二人がいなければ本報告は生まれなかったものと思われる。また、聞き取り調査では丹 敬子氏ほか同町に住む多くの方々にお世話になった。一人一人のお名前をあげることはできないが、お忙しい中、筆者の質問にいろいろとお答えいただいたこれらの方々にお礼申し上げたい。また原稿を校閲し、貴重なご意見をいただいた山田高嗣氏（国際雪形研究会）にも厚く御礼申し上げる。

**参考文献**

- 秋田谷英次, 1996. 自然とのふれあいー雪形を例としてー. 寒地技術論文・報告集, 12(2): 632-636.
- 佐藤雅彦・小林俊市・山田高嗣, 2004. 道北地域の雪形について. 北海道開発技術センター(編), 寒地技術論文・報告集, 20: 828-830. 札幌.
- 田淵行男, 1981. 山の紋章 雪形. 学習研究社.
- 山田高嗣, 2000. 北海道の雪形. 特集雪の系譜 雪形と伝説5. ゆきのまち通信, (69): 7-14.
- 山田高嗣・佐藤雅彦・小松和恵, 2001. 利尻島の雪形に関する調査研究(1). 利尻研究, (20): 85-94.